



議会傍聴席から 記者の目

【別府】新型コロナウイルスの影響は長期化し、市民生活に影響を落として続けている。

別府市議会9月定例会の一般質問には市議14人が立ち、コロナ関連の質問を重ねた。

コロナ禍は経済や地域コミュニケーションなどに打撃を与えた一方で、社会変革のうねりも生んだ。

急速なデジタル化の進展はその一つだろう。

市は6月に「BEPPU×デジタルファースト推進計画」を策定した。スローガンは「ポケットの中に、もう一つの市役所を」。市民がスマートフォンを利用し、い

“デジタル弱者”に配慮を

つでもどこでも行政サービスを提供する環境を整える。

市議の一人は「スマホを持っていない人が取り残されないか」とただした。執行部は「デジタル

化で業務負担の軽減を図り、対応に力を入れていく」と説明。デジタル端末の操作が苦手な人もサービスが向上すると強調した。

一方で苦手な人もデジタルの便利さを享受できればさらに望ましいのではないかと。スマホの購入費補助やシニア向けの操作教室を開く自治体も出てきた。「挑戦してみよう」と思った市民に対する支援も重要だ。

(伊藤友仁)

地域面に掲載される「議会傍聴席から記者の目」を読みましょう。今回、別府市議会を傍聴した記者が、デジタル化について意見を述べています。

2021年10月6日付 大分合同新聞 12面

①記者は、「コロナ禍が生んだ社会変革」の一つとして、何を挙げていますか。

.....

②別府市が6月に策定した「BEPPU×デジタルファースト推進計画」について、別府市議会では、どのような質疑応答がありましたか。

【質問】「.....」

【答え】「.....」

③皆さんの周りで、最近、「デジタル化が進んでいる」ことを挙げてください。

このデジタル化で何が改善されますか。課題は何ですか。今後どう進めるべきですか。

.....

.....

.....

.....

.....